



Title	環境保全における文学の貢献 台湾と日本における油症の比較を中心に
Author(s)	金, 星
Citation	(2019-03-20)
Issue Date	2019-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10069/38973
Right	

This document is downloaded at: 2019-09-23T01:12:12Z

環境保全における文学の貢献

—台湾と日本における油症の比較を中心に—

長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科

金星

論文内容の要旨

本論文の課題は、環境保全における環境文学の社会的な役割を考察することである。

①複数の作品を通して、これまでの環境文学の特徴とその定義がどのように変わってきたかを明確にするとともに、環境文学の役割を具体的に追求した。②文献調査及び聞き取り調査によって、『被遺忘的 1979——台湾油症事件三十年』（邦訳：『忘れてきた 1979——台湾油症事件三十年』、以下『台湾油症事件三十年』）の中で登場する環境問題、すなわち油症事件をピックアップし、台湾油症を考察した。③世界中で日本と台湾にのみ発生した油症事件について両国の対応を比較・考察した。

油症は人類が初めて経験した PCBs 及び PCDFs 集団食中毒事件である。1968 年の秋、福岡県北九州市に始まって西日本一帯に及んで発覚した「カネミ油症」(Yusho) 事件から 10 年目の 1978 年末、台湾の台中県及び彰化県でも油症が発覚した。それはカネミ油症とほぼ同じような症状を有するものであって「台湾油症」(Yucheng) と言われる。すなわち、米ぬか油がポリ塩化ビフェニル (PCBs) や、ダイオキシン類の一種であるポリ塩化ジベンゾフラン (PCDFs) などに汚染されたことによる化学性食中毒事件である。

2010 年陳昭如著『台湾油症事件三十年』が出版された。この作品は陳昭如が関連文献資料を整理し、当事者にインタビューして、物語形式によって、台湾油症の全貌を初めて明らかにした一般読者向けのルポルタージュである。この作品では、具体例は実名のままに記され、大量の確実な事実及び各種の科学データによって、当時の状況が示されている。

研究動機・先行研究・研究目的は序章で紹介した。

第 1 章「陳昭如著『被遺忘的 1979：台湾油症事件 30 年』にみられる食中毒事件」では、食中毒事件である台湾油症事件発生の経緯、患者の症状、政府の対応について、『台湾油症事件三十年』がいかに取り上げられ、どのように展開されたかの検討を行った。この作品が社会に与えた影響を通して、食中毒問題がいかに認識されているかについて考察した。

第 2 章「カネミ油症と台湾油症の比較——患者の症状、認定基準（日本）・患者登録（台湾）を中心に」では、台湾と日本とは異なる社会背景を持つが、2 つの油症事件については、いまだに未知の部分が多いことが現実である。さらに、先行研究において、カネミ油症事件と台湾油症事件の比較研究は非常に少ないので、この両事件の比較研究を行った。油症被害者及び支援者数十名に直接聞き取り調査を実施し、文献及び現地入手した 1 次資料等を参考にして、健康被害について、油症問題の長期にわたる、治療困難性及び胎児性患者の存在などの特徴を考察した。その結果、両油症事件では、おそらくほぼ同一レベルのダイオキシン汚染による中毒症状が発現したとみなすことができるであろう。

さらに、食中毒としてのいわゆる「認定基準」（日本）や「患者登録」（台湾）について考察した。両油症事件は、環境汚染を経由しないため法律上の「公害」ではなく、法的な位置づけとしては食中毒事件である。一方、油症は慢性疾患である点などが公害に類似しており、マスコミや市民運動などから「食品公害」と呼ばれることが少なくない。

しかしながら、食中毒事件の被害患者としての認定条件は厳しすぎると思われる。現実の問題として、当然認定されるべき患者が公式認定されていない。認定条件について、1971年の水俣病の判断条件（原因食品摂取の確認と1つ以上の症状が判定要件）を参考にすることを提案し、検討した。さらに、油症に関係する様々な分野での聞き取り調査の結果をまとめた。それによって、台湾油症とカネミ油症被害の補償が不十分であるなどの現状を明らかにした。第2章が、カネミ油症と台湾油症の比較考察への第1歩にあることを願う。

第3章「その他の環境文学にみられる環境問題」では、その他の環境文学、「現代日本の公害の原点」といわれる水俣病についての石牟礼道子著『苦海浄土 わが水俣病』、2015年ノーベル文学賞を受賞したベラルーシのスヴェトラーナ・アレクシエービッチ著『チェルノブイリの祈り』、環境保護先駆者としての戴晴著『三峡ダム——建設の是非をめぐっての論争』、中国の大気汚染問題についての柴静著『中国メディアの現場は何を伝えようとしているか：女性キャスターの苦悩と挑戦』、画期的な意義があるアメリカのレイチェル・カーソン著『沈黙の春』、「日本のカーソン」とも言われる綿貫礼子著『胎児からの黙示』、毒性物質の複合がもたらす汚染の実態を訴える日本の有吉佐和子著『複合汚染』及び『有吉佐和子の中国のレポート』という環境文学を分析した。先行研究によると、『苦海浄土 わが水俣病』と『沈黙の春』に関する論文・記事が多数あるが、ほかの作品に関する研究、特にその作品にみられる環境問題についての研究は非常に乏しい。

論文要旨及び新規性・独創性は終章で紹介した。台湾油症とカネミ油症の詳細な比較、陳昭如や柴静の作品の環境文学としての考察などある。

本論文では、上記作品の内容と影響について分析し、その中に挙げた環境問題を考察した。従来の環境文学の主題は人間と自然の関係である。人間と自然の関係を扱っている作品は環境文学といえる。しかしながら、人間と人間の間を主に表現する『台湾油症事件三十年』も環境文学といえる。本論文が挙げた「環境文学」の中の「環境」は、「自然環境」と「社会環境」の両方を含むものである。すなわち、人間と自然、人間と人間の間を扱うことである。「文学」は、固有の人間の内面を描写する。この手法によって、作品の中で、環境問題をわかりやすく説明し、一般人に認識してもらうことができる。従って、文学作品が一般人の環境意識を高めることに寄与している。人間・社会・自然の間を扱う文学作品はそれぞれ独自の主題と表現方法によって環境保護の意識を育てる役割を果たしていることを明らかにした。